上越教育大学研究紀要　第28巻　平成21年２月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 28, Feb. 2009

現職小学校教員の小学校英語活動の研修希望内容に関する調査研究

北　條　礼　子*

（平成20年９月30日受付；平成20年11月17日受理）

KEY WORDS
研修　　クラスルーム・イングリッシュ　　小学校英語活動

１．研究の背景

文部科学省による小学校英語活動実施状況調査の結果をみると，平成19年度には全国の公立小学校21,864校のうち，21,220校が何らかの英語活動を実施しており，実施割合は97.1％になっている。しかし，全国の公立小学校の英語活動は年間授業時数や活動内容をはじめ，かなりの格差があることも事実である。また平成23年度より小学校高学年第５，６年で週１回35回程度，外国語（英語）活動が導入されることも決定されている。平成21年度から移行措置として，英語ノートを用いながらの外国語（英語）活動（以降，英語活動）が実施される小学校も増加することが予想される。国として，教員研修の充実，指導者の確保や共通教材の提供などの条件整備が必要性も述べられている。しかし，教員研修については，国，地方自治体，大学，民間が実施しているが，十分な状況にない（樋口編，2005）。

このような小学校英語教育の条件整備が順調に進んでいるとはいえない現状の下，現職公立小学校教員の小学校英語に関する意識，希望にきめ細かく応えながら，小学校英語の条件整備に向けて，現職公立小学校教員が現在何が必要で重要であると考えているかを明らかにすることは意義があると考えられる。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は，小学校英語活動において必要と考えられる研修希望内容を明らかにすることである。本研究の第二の目的は，中・高の英語免許を所持しているか所持していないかで小学校英語活動の研修希望内容に違いがあるかどうかを明らかにすることである。本研究の第三の目的は，小学校英語活動の実施経験があるかないかによって，小学校英語活動の研修希望内容に違いがあるかどうかを明らかにすることである。本研究の第四の目的は，小学校教員はどのようなクラスルーム・イングリッシュやALTとの打ち合わせの時に英語表現が必要だと思うかを明らかにすることである。

３．研究の方法

３．１　実施時期：2006年８月
３．２　対象者：上越市の現職小学校教員385名
３．３　測定具：フェースシート７項目，研修内容希望に関する内容の５段階尺度形式22項目とクラスルーム・イングリッシュやALTと打ち合わせをする際に知っていれば便利だと思う英語表現に関する自由記述から成るアンケート
３．４　分析方法：直接確率計算，χ^2検定，分散分析

４．研究の結果

４．１　フェースシートの項目について

アンケート調査であるが，まずフェースシートにおいて，小学校英語の研究開発学校あるいは研究指定校に在籍し

*人文・社会教育学系

た経験の有無，中･高英語科の免許の所持，小学校英語活動を直接参観した経験または授業を実施した経験の有無，「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」の一環としての英語活動の実施や小学校における英語の教科化に関する賛否という６項目について上越市内の小学校教員の意識を調べた。６項目の集計結果と直接確率計算結果は表１に示すとおりである。

表１から，小学校英語の研究開発学校あるいは研究指定校に在籍した経験の有無については，直接確率計算の結果，在籍経験がない教員数は，在籍経験のある教員数より１％レベルで有意に多いことがわかった。中・高の英語科免許の所持については，所持者が 44 名であったが，所持していない教員数より１％レベルで有意に少なかった。小学校英語活動については，直接参観した経験や，実施した経験のある教員数の方が経験のない教員数より１％レベルで有意に多かった。さらに，英語活動のとらえ方であるが，「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」の一環としての英語活動の実施に賛成する教員が１％レベルで有意に多く，小学校英語の教科化には反対の教員が１％レベルで有意に多いことがわかった。

表１：フェース・シート項目の回答の頻度数と直接確率計算結果（N = 385）

項目	項　目　内　容	回答数		直接確率計算結果結果	
		肯定	否定	p	肯定　　否定
1	小学校英語の研究開発学校あるいは研究指定校に在籍した経験	7	378	.00**	＜
2	中・高の英語科の免許の所持	44	341	.00**	＜
3	小学校英語活動を直接参観した経験	233	152	.00**	＞
4	小学校英語活動を実施した経験	257	128	.00**	＞
5	「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」の一環としての英語活動の実施に賛成	301	84	.00**	＞
6	小学校における英語の教科化に賛成	81	304	.00**	＜

** p<.01

４．２　研修希望内容について

４．２．１　対象者全員について

本研究の対象者である上越市の現職小学校教員 385 名全員による小学校英語活動の研修に対する希望内容に関する 22 項目について平均（M）と標準偏差（SD）を求めたが，その結果は表２に示すとおりである。各項目の平均は 3.24 から 4.16 を推移しており，概してどの内容も肯定的に捉えられていた。平均が４点台を示した項目内容をみると，研修内容として，英語のゲームと一般的指導方法・技術や教材・教具の作り方，クラスルーム・イングリッシュ，ALT との打合せに必要な英語表現，身近で応用の利く一般的な英語表現という英語力に関する希望，国際理解教育や英語圏の人々・文化の知識の大別して３つの特色があるようである。

さらに，小学校英語の研修に対する希望内容に関する 22 項目のうち，本調査の対象となった公立小学校教員がどのような研修内容が必要であると捉えらているかを調べるため，分散分析を実施した。その結果，１％レベルで有意差がみられた（$F(20, 8064) = 47.11$, p<.01）。そのためさらに LSD 法による多重比較を行った結果（$MSe = 0.44$, p<.05），22 項目のうち，項目 15 の臨界期仮説が他の研修内容に比べると研修希望が最も低く，項目 19 の授業分析方法と項目 16 のカリキュラム開発方法が次研修希望の低い内容であることが明らかになった。ただし，臨界期仮説の項目の平均は 3.24 であり，他の２項目の平均も 3.52，3.54 であり，研修希望の強さとしては特に低いわけではない。

４．２．２　中・高の英語免許の所持別による回答について

本研究の対象者である上越市の現職小学校教員 385 名のうち，中・高英語免許を所持している教員は 44 名，所持していない教員は 341 名であった。それぞれの群の小学校英語活動の研修に対する希望内容に関する 22 項目について平均（M）と標準偏差（SD）を求めたが，その結果は表３に示すとおりである。

次に，小学校英語活動の実施経験があるかどうかで，研修希望に差があるのかどうかをみるため，まずそれぞれの群ごとに 22 の項目内容における差がみられるかどうかを検定した。

まず，中・高の英語免許を所持しているかどうかで研修希望内容に違いがあるかどうかをみるため，まず，群ごと

表２：英語活動に関する研修希望内容の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）（*N*＝385）

項目	項　目　内　容	*M*	*SD*
1	英語の歌の指導法	3.74	.99
2	チャンツの活用法	3.97	.92
3	英語のゲームの進め方	4.16	.83
4	マザー・グース，ナーサリー・ライム	3.78	.87
5	フォニックスの指導法	3.78	1.00
6	英語活動の一般的指導方法・技術	4.15	.89
7	クラスルーム・イングリッシュ	4.08	.94
8	ALT との話合いに役立つ英語表現	4.07	.86
9	身近で応用の利く一般的英語表現	4.11	.84
10	国際理解教育に関する知識	4.06	.78
11	英語圏の人々の性格・文化の知識	4.00	.80
12	英語の文化的，言語的知識	3.91	.84
13	日本文化に関する知識	3.84	.97
14	英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識	3.71	.91
15	臨界期仮説	3.24	1.01
16	カリキュラム開発方法	3.54	.94
17	英語活動の年間指導計画の立て方	3.82	.90
18	英語活動の活動案の立て方	3.92	.88
19	授業分析方法	3.52	.91
20	英語活動の評価方法	3.68	.94
21	教材や教具の作り方	4.03	.89
22	インターネットによる情報収集方法	3.71	.95

に分散分析を実施した。その結果，１％レベルで有意差がみられた（$F(20, 903) = 3.56$, $p<.01$）。そのためさらに *LSD* 法による多重比較を行った結果（$MSe = 0.35$, $p<.05$），22 項目のうち有意に希望が低い研修内容はみられなかった。

一方，中・高の英語免許を所持していない小学校教員がどのような研修内容が必要であると捉えらているかを調べるため，分散分析を実施した。その結果，１％レベルで有意差がみられた（$F(20, 7140) = 44.94$, $p<.01$）。そのためさらに *LSD* 法による多重比較を行った結果（$MSe = 0.45$, $p<.05$），22 項目のうち，項目 15 の臨界期仮説が他の研修内容に比べると研修希望が最も低く，項目 19 の授業分析方法と項目 16 のカリキュラム開発方法が次研修希望の低い内容であることが明らかになった。ただし，臨界期仮説の項目の平均は 3.24 であり，他の２項目の平均も 3.52，3.54 であり，研修希望の強さとしては特に低いわけではなかった。

以上から，中・高の英語免許を所持しているかしていないかにより，特に希望が低い研修内容について，研修希望内容にある程度の違いが存在することが明らかになった。

次に，中・高の英語免許を所持している小学校教員 44 名と所持していない小学校教員 341 名で，22 の研修内容に対する希望に差があるかどうかを調べるため，分散分析を実施したが，その結果は表４に示すとおりである。表４から，項目 15 の臨界期仮説において英語の免許所持者の方が所持していない者より，５％レベルで研修希望が強いことがわかった（$F(1,383) = 5.20$, $p<.05$）。また，項目６の英語活動の一般的指導方法・技術において，英語の免許を所持していない小学校教員の方が研修希望が強い傾向があることが示された（$F(1,383) = 3.11$, $.05<p<1.0$）。他の 20

表３：中・高英語免許所持・不所持別による研修希望内容の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）（*N* = 385）

		全　体		中・高免許	英語所持	中・高免許	英語なし
		385	385	44	44	341	341
項目	項　目　内　容	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	英語の歌の指導法	3.74	.99	3.82	.90	3.73	1.00
2	チャンツの活用法	3.97	.92	3.98	.73	3.96	.94
3	英語のゲームの進め方	4.16	.83	4.05	.81	4.17	.84
4	マザー・グース，ナーサリー・ライム	3.78	.87	3.93	.79	3.77	.88
5	フォニックスの指導法	3.78	1.00	3.93	.85	3.76	1.02
6	英語活動の一般的指導方法・技術	4.15	.89	3.93	.82	4.18	.89
7	クラスルーム・イングリッシュ	4.08	.94	4.00	.81	4.08	.94
8	ALT との話し合いに役立つ英語表現	4.07	.86	4.05	.81	4.07	.86
9	身近で応用の利く一般的英語表現	4.11	.84	4.23	.68	4.11	.84
10	国際理解教育に関する知識	4.06	.78	4.09	.68	4.06	.78
11	英語圏の人々の正確・文化の知識	4.00	.80	4.14	.59	4.00	.80
12	英語の文化的，言語的知識	3.91	.84	4.02	.73	3.91	.84
13	日本文化に関する知識	3.84	.97	3.91	.80	3.84	.97
14	英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識	3.71	.91	3.80	.90	3.71	.91
15	臨界期仮説	3.24	1.01	3.57	.87	3.24	1.01
16	カリキュラム開発方法	3.54	.94	3.64	.69	3.54	.94
17	英語活動の年間指導計画の立て方	3.82	.90	3.86	.82	3.81	.86
18	英語活動の活動案の立て方	3.92	.88	3.84	.86	3.93	.89
19	授業分析方法	3.52	.91	3.73	.76	3.52	.91
20	英語活動の評価方法	3.68	.94	3.68	.93	3.68	.94
21	教材や教具の作り方	4.03	.89	3.89	.95	4.04	.88
22	インターネットによる情報収集方法	3.71	.95	3.68	.91	3.71	.95

表４：中・高英語免許所持・不所持別による研修希望内容の分散分析結果（*N* = 385）

		中・高免許	英語所持	中・高免許	英語なし	分散結果	分析	大小比較
		44		341				有　無
項目	項　目　内　容	*M*	*SD*	*M*	*SD*	$F(1,383)$	*p*	
1	英語の歌の指導法	3.82	.90	3.73	1.00	.31	*ns*	
2	チャンツの活用法	3.98	.73	3.96	.94	.01	*ns*	
3	英語のゲームの進め方	4.05	.81	4.17	.84	.91	*ns*	
4	マザー・グース，ナーサリー・ライム	3.93	.79	3.77	.88	1.42	*ns*	
5	フォニックスの指導法	3.93	.85	3.76	1.02	1.16	*ns*	
6	英語活動の一般的指導方法・技術	3.93	.82	4.18	.89	3.11	†	＜
7	クラスルーム・イングリッシュ	4.00	.81	4.08	.94	.36	*ns*	
8	ALT との話し合いに役立つ英語表現	4.05	.81	4.07	.86	.04	*ns*	
9	身近で応用の利く一般的英語表現	4.23	.68	4.11	.84	.90	*ns*	
10	国際理解教育に関する知識	4.09	.68	4.06	.78	.06	*ns*	
11	英語圏の人々の正確・文化の知識	4.14	.59	4.00	.80	1.44	*ns*	
12	英語の文化的，言語的知識	4.02	.73	3.91	.84	.95	*ns*	
13	日本文化に関する知識	3.91	.80	3.84	.97	.26	*ns*	
14	英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識	3.80	.90	3.71	.91	.42	*ns*	
15	臨界期仮説	3.57	.87	3.24	1.01	5.20	*	＞
16	カリキュラム開発方法	3.64	.69	3.54	.94	.52	*ns*	
17	英語活動の年間指導計画の立て方	3.86	.82	3.81	.86	.14	*ns*	
18	英語活動の活動案の立て方	3.84	.86	3.93	.89	.42	*ns*	
19	授業分析方法	3.73	.76	3.52	.91	2.49	*ns*	
20	英語活動の評価方法	3.68	.93	3.68	.94	.00	*ns*	
21	教材や教具の作り方	3.89	.95	4.04	.88	1.23	*ns*	
22	インターネットによる情報収集方法	3.68	.91	3.71	.95	.03	*ns*	

† $.05<p<.10$　$^{*}p<.05$

項目の研修内容については有意な差はみられなかった。

４．２．３　小学校英語活動の実施経験の有無別による回答について

本研究の対象者である上越市の現職小学校教員 385 名のうち，小学校英語活動の実戦経験のある教員は 257 名，経験のない教員は 128 名であった。それぞれの群の小学校英語活動の研修に対する希望内容に関する 22 項目について平均（*M*）と標準偏差（*SD*）を求めたが，その結果は表５に示すとおりである。

次に，小学校英語活動の実戦経験があるかどうかで，研修希望に差があるのかどうかをみるため，まずそれぞれの群ごとに 22 の項目内容における差がみられるかどうかを検定した。

表５：英語活動実施経験の有無による研修希望内容の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）　（*N* = 385）

		全　体		実施経験あり		実施経験なし	
		385		257		128	
項目	項　目　内　容	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
1	英語の歌の指導法	3.74	.99	3.80	.93	3.63	1.10
2	チャンツの活用法	3.97	.92	4.07	.86	3.76	.99
3	英語のゲームの進め方	4.16	.83	4.21	.79	4.05	.90
4	マザー・グース，ナーサリー・ライム	3.78	.87	3.85	.80	3.65	1.00
5	フォニックスの指導法	3.78	1.00	3.86	.98	3.62	1.03
6	英語活動の一般的指導方法・技術	4.15	.89	4.25	.86	3.96	.92
7	クラスルーム・イングリッシュ	4.08	.94	4.19	.89	3.87	1.02
8	ALT との話合いに役立つ英語表現	4.07	.86	4.16	.79	3.89	.97
9	身近で応用の利く一般的英語表現	4.11	.84	4.16	.78	4.03	.95
10	国際理解教育に関する知識	4.06	.78	4.11	.74	3.97	.84
11	英語圏の人々の正確・文化の知識	4.00	.80	4.02	.77	3.96	.85
12	英語の文化的，言語的知識	3.91	.84	3.93	.82	3.87	.88
13	日本文化に関する知識	3.84	.97	3.81	.97	3.90	.96
14	英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識	3.71	.91	3.78	.88	3.57	.97
15	臨界期仮説	3.24	1.01	3.30	.95	3.14	1.11
16	カリキュラム開発方法	3.54	.94	3.63	.90	3.36	1.00
17	英語活動の年間指導計画の立て方	3.82	.90	3.90	.89	3.82	.90
18	英語活動の活動案の立て方	3.92	.88	4.02	.89	3.92	.88
19	授業分析方法	3.52	.91	3.58	.88	3.52	.91
20	英語活動の評価方法	3.68	.94	3.76	.90	3.68	.94
21	教材や教具の作り方	4.03	.89	4.11	.86	4.03	.89
22	インターネットによる情報収集方法	3.71	.95	3.74	.93	3.71	.95

まず，小学校英語活動の実施経験のある小学校教員がどのような研修内容を希望しているかを調べるため，分散分析を実施した。その結果，１％レベルで有意差がみられた（$F(20, 5376) = 33.02, p<.01$）。そのためさらに *LSD* 法による多重比較を行った結果（$MSe = 0.44, p<.05$），22 項目のうち，項目 15 の臨界期仮説のみが他の研修内容に比べると研修希望が最も低い内容であることが明らかになった。ただし，臨界期仮説の項目の平均は 3.30 であり，研修希望の強さとしては特に低いわけではなかった。

一方，小学校英語活動の実施経験のない小学校教員がどのような研修内容を希望しているかを調べるため，分散分析を実施した。その結果，１％レベルで有意差がみられた（$F(20, 2667) = 16.11, p<.01$）。そのためさらに *LSD* 法による多重比較を行った結果（$MSe = 0.45, p<.05$），22 項目のうち，項目 15 の臨界期仮説のみが他の研修内容に比べると研修希望が最も低いことが明らかになった。ただし，臨界期仮説の項目の平均は 3.14 であり，研修希望の強さとしては特に低いわけではなかった。

以上から，英語活動の実施経験の有無によらず，臨界期仮説に対する研修希望が最も低いことがわかった。

表６：英語活動実施経験の有無による研修希望内容の分散分析結果（N = 385）

		実施経験 あり（257）		実施経験 なし（128）		分散分析 結果		大小 比較
項目	項　目　内　容	M	SD	M	SD	F (1,383)	p	有　　無
1	英語の歌の指導法	3.80	.93	3.63	1.10	2.60	*ns*	
2	チャンツの活用法	4.07	.86	3.76	.99	10.09	**	＞
3	英語のゲームの進め方	4.21	.79	4.05	.90	3.45	†	＞
4	マザー・グース，ナーサリー・ライム	3.85	.80	3.65	1.00	4.69	*	＞
5	フォニックスの指導法	3.86	.98	3.62	1.03	5.08	*	＞
6	英語活動の一般的指導方法・技術	4.25	.86	3.96	.92	9.21	**	＞
7	クラスルーム・イングリッシュ	4.19	.89	3.87	1.02	10.01	**	＞
8	ALT との話し合いに役立つ英語表現	4.16	.79	3.89	.97	8.48	**	＞
9	身近で応用の利く一般的英語表現	4.16	.78	4.03	.95	1.88	*ns*	
10	国際理解教育に関する知識	4.11	.74	3.97	.84	2.93	†	＞
11	英語圏の人々の正確・文化の知識	4.02	.77	3.96	.85	0.46	*ns*	
12	英語の文化的，言語的知識	3.93	.82	3.87	.88	0.42	*ns*	
13	日本文化に関する知識	3.81	.97	3.90	.96	0.73	*ns*	
14	英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識	3.78	.88	3.57	.97	4.63	*	＞
15	臨界期仮説	3.30	.95	3.14	1.11	2.03	*ns*	
16	カリキュラム開発方法	3.63	.90	3.36	1.00	7.17	*	＞
17	英語活動の年間指導計画の立て方	3.90	.89	3.82	.90	7.30	*	＞
18	英語活動の活動案の立て方	4.02	.89	3.92	.88	9.60	**	＞
19	授業分析方法	3.58	.88	3.52	.91	3.29	†	＞
20	英語活動の評価方法	3.76	.90	3.68	.94	6.43	*	＞
21	教材や教具の作り方	4.11	.86	4.03	.89	6.24	*	＞
22	インターネットによる情報収集方法	3.74	.93	3.71	.95	1.16	*ns*	

† $.05<p<.10$　$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$

次に，英語活動の実施経験のある小学校教員 257 名と実施経験のない小学校教員 128 名で，22 の研修内容それぞれに対する希望に差があるかどうかを調べるため，分散分析を実施したが，その結果は表６に示すとおりである。表６をみると，22 項目中，５項目において１％レベルで有意差がみられ，７項目において５％レベルで有意差がみられ，３項目において有意傾向がみられた。なお，以上の 15 項目すべてにおいて英語活動実施経験者の希望が強かった。ここで１％レベルで有意差が示された項目をみると，項目２のチャンツの活用法（$F(1,383)=10.09^{**}$），項目６の英語活動の一般的指導方法・技術（$F(1,383)=9.21^{**}$），項目７のクラスルーム・イングリッシュ（$F(1,383)=10.01^{**}$），項目８の ALT との話し合いに役立つ英語表現（$F(1,383)=8.48^{**}$），項目 18 の英語活動の活動案の立て方（$F(1,383)=9.60^{**}$）であり，実際の英語活動に直結した内容と英語力の向上にかかわる内容であった。５％レベルで有意差がみられた項目は，項目４のマザー・グース，ナーサリー・ライム（$F(1,383)=4.69^{*}$），項目５のフォニックスの指導法（$F(1,383)=5.08^{*}$），項目 14 の英語活動の趣旨・ねらいの体系的知識（$F(1,383)=4.63^{*}$），項目 16 のカリキュラム開発方法（$F(1,383)=7.17^{*}$），項目 17（$F(1,383)=7.30^{*}$）の英語活動の年間指導計画の立て方，項目 20 の英語活動の評価方法（$F(1,383)=6.43^{*}$），項目 21 の教材や教具の作り方（$F(1,383)=6.24^{*}$）であった。さらに有意傾向を示した項目は，項目３の英語のゲームの進め方（$F(1,383)=3.45$†）と項目 10 の国際理解教育に関する知識（$F(1,383)=2.93$†）であった。

以上から，英語活動を実施した経験のある小学校教員は，研修希望が強いことがわかる。研修希望内容は英語活動の実施に直接関連する内容から自分自身の英語力の向上であった。

４．３　自由記述式回答内容について

本研究では自由記述式で「ALT との打ち合わせなどでの表現」,「ALT との打ち合わせなどでの表現その他にあったら便利な表現」,「その他にあったら便利な表現」についてそれぞれ以下のような回答が得られた。

４．３．１　知りたい英語表現：クラスルーム・イングリッシュ

クラスルーム・イングリッシュとして知りたい英語表現については以下の表７に示すような回答がみられた。

表７：知りたい英語表現：クラスルーム・イングリッシュへの自由記述式回答

・授業の始め方と終わり方
・教師から話すのか子どもから話すのか
・グループごとにまっすぐならびましょう。
・静かにしましょう。
・えんぴつをよういしましょう。
・授業のおわりのあいさつ。特に２・３限でまだその日のうちにＡＬＴに会いそうな時の授業の終わりのあいさつ。
・机を後ろへ下げましょう。
・行事等の言い方。音楽発表会など。
・「よろしくお願いします」など丁寧な言葉使いを英語ではどのように表現するのか。
・プリントを列の後ろへまわす。
・机を後ろへおくる・輪になって座る。
・手をあげる。
・ＡＬＴの先生に「時間なので次の活動にうつりましょう。」という時。
・ＡＬＴの先生の呼び方。（～ sennsei? ～ teacher?　Mr. ～ ?）
・もう一度言いましょう。
・よく聞きましょう。
・話をやめましょう。
・くり返していいましょう。
・英語活動を始めましょう・これで英語活動の学習を終わります。
・板書しましょう。
・姿勢を正しくしましょう。
・日本文化を話そうとした時，表現がわからなかった。
・配ります・集めます・一人〇枚。
・礼！
・賛成や反対意見はありませんか。
・ノートに写しなさい。
・あと１分です。

４．３．２　ＡＬＴとの打ち合わせなどでの表現

ALT との打ち合わせなどでの表現については以下の表８に示すような回答がみられた。

表８：ＡＬＴとの打ち合わせなどでの表現への自由記述式回答

・よろしくお願いします。（Thank you でいいのか。）
・今日は急な行事で時間割変更があります。
・お願いします・おつかれさまでした。
・何時間目・何年何組
・３時間目・担任
・説明してください・教えてください・子どもたちの様子を見て進めましょう。
・時間がなかったら短くするかなしにする。
・ＪＴＥの私が主となって授業を進めます。ＡＬＴのあなたは協力・支援してください。
・授業の連携について話し合いをしましょう。
・英語活動の内容や方法など詳しいことを話し合うときに迷うことがある。
・その場面では子どもにどんな支援をすればよいでしょうか。
・他にもっとよい活動（ゲーム，歌）があったら，それにかえてください。

・英語表現すべて。
・おすすめの題材や教材はありますか。
・～の表現を多く練習するにはどのような活動がいいでしょう。
・ちょっといいですか？と声をかけて聞くとき。
・特別支援学級の言い方，子どもの特性を説明するのが難しかった。ＡＬＴは”special student”と 表現していた。
・今日の予定について管理職から話がありましたか。
・次が教室移動等で時間を延ばせない。
・計画が変更になったので説明したいのですが。
・どんな種類のゲームを知っていますか。
・子どもたちの反応はどうでしたか。
・お疲れ様でした。
・何か分からないことはありますか。
・子どもたちも大変喜んでいました。
・時間がまだあるので他のゲームや活動をもう少ししてもらいたい。
・事前に準備する。
・机間巡視。
・グループ分け。
・発言を引き出す。

以上の表７，８の自由記述式の回答をみると，授業の開始，終了のあいさつに始まり，特別支援学級の言い方，子どもの特性の説明の仕方というような，かなり切実な内容の回答もみられた。また，「宜しくお願いします」や「お疲れ様でした」というような英語に直接翻訳が難しいような表現もあげられていたが，このような表現については解説することもさほど困難ではないと考えられる。中には英語表現すべて，という回答もあったが，まずクラスルーム・イングリッシュから覚えていくのが結局，英語を用いていく早道ではないだろうか。

５．考　　察

樋口他（2005）は教員対象のアンケート結果から，教員が必要と感じている研修内容として，授業に直接関わる内容，背景的・理論的な内容，英語の研修の３点をあげているが，本研究の結果は，樋口他（2005）の結果と同様のものであった。以上から教員研修の内容については，授業に直接関わる内容，背景的・理論的な内容，英語そのものの研修が必要だと考えられる。この研修内容の中でも，移行措置を考えると来年度の平成 21 年度から公立小学校の学級担任が中心となって小学校英語教育に携わっていくことが予想される。このような現状の下では ALT との打合せに必要な英語表現をはじめ，クラスルーム・イングリッシュ等の英語研修がますます重要かつ必要になってくると考えられる。

さらに，表７から表８に示したような内容を見る限り，英語表現集を作成することはそれほど難しいとは思われない。大学においても外国人教師の協力を得て，現場の小学校教員ばかりでなく，これから小学校英語教員を目指す大学生，大学院生のためになるように，以上のような ALT との打合せに必要な英語表現をはじめ，クラスルーム・イングリッシュを中心とする英語表現集を作成することを予定している。

引用・参考文献

樋口忠彦他編．2005.「これからの小学校英語教育―理論と実践―」．研究社.

樋口忠彦他．2005.「小学校の英語教育はいま⑤―指導者の研修と養成」．『英語教育』．２月号．48-50.

松崎邦守･北條礼子．2003.「公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査―公立小学校現職教育に対するアンケート調査をとおして―」．日本児童英語教育学会紀要．第 22 号．101-124.

北條礼子･松崎邦守．2004.「公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査―公立小学校教諭初任者に対するアンケート調査をとおして―」『小学校英語教育学会紀要』第４号．33-39.

北條礼子・松崎邦守・宮城県塩竈市教育委員会．2005.「小学校英語活動に関する塩竈市小学校教員・中学校教員に対する意識調査―状況分析モデルによる小学校研修カリキュラム試案づくりをめざして―」．『小学校英語教育学会紀要』．第

５号．43-48.
北條礼子・松崎邦守．2008.「現職小学校教員の小学校英語活動（支援，校種間連携，研修希望内容等）への意識に関する調査研究」.『小学校英語教育学会紀要』．　第８号．97-104.
松川禮子．2004.『明日の小学校英語教育を拓く』．　東京：アプリコット．
松崎邦守･北條礼子．2003.「公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査―公立小学校現職教員に対するアンケート調査をとおして―」.『日本児童英語教育学会紀要』．第 22 号．101-124.
伊東弥香・金澤延美．2006.「小学校英語の指導者に求められる資質と必要とされる指導者研修―公立小学校教員の『英語活動』に関する意識調査」.『小学校英語教育学会紀要』．第７号．１- ６．

A Survey of Elementary School Teachers' Hopes for the Contents of Training Courses of English Activities

Reiko HOJO *

ABSTRACT

The purposes of this study are to investigate the contents of training courses of English activities at elementary school which public elementary school teachers hope to take, and to obtain English expressions which elementary school teachers want to know. In August of 2006, three hundred eighty-five elementary school teachers in Joetsu city answered the questionnaires, consisting of a face sheet, 5-point Likert scale twenty-two items concerning the contents of training courses of English, and free comments of *Classroom English* the teachers want to know and those of English expressions which are useful for talking with ALTs. The data was analyzed by a chi-square test, Fisher's exact test and ANOVA. The results of the face sheet revealed that the number of the teachers who have experienced teaching English to pupils was significantly more than those who have not; the number of the teachers who have English teaching certificate was significantly less than those who do not. Moreover, concerning the results of the 22 items, all the teachers felt 22 items to be necessary for them. The teachers who have experienced teaching English felt stronger hopes for 15 items of the training courses than those who have not. The free comments by the teachers showed that English expressions they wanted to know were not so difficult to interpret. Thus our university staff (the author and a British English teacher) could make a leaflet of useful English expressions for elementary school teachers as well as university and graduate school students who hope to become elementary school teachers.

* Humane Studies and Social Studies Education